

橋川 武郎

きっかわ・たけお—橋大学大学院商学研究
科教授。総合資源エネルギー調査会臨時委員。
主著は『日本電力業発展のダイナミズム』(名
古屋大学出版会)など。55歳。



今年3月まで勤務していた東京
大学社会科学研究所が現在取り組
んでいる「希望学」の釜石調査プ
ロジェクトのメンバーとして、昨
年から今年にかけて、いく度か釜石
市を訪れた。希望学とは、「希望
を社会科学する」を合言葉に、希
望と社会との関係を考察しようと
する、新しい学問のことである。

岩手県釜石市。日本の近代製鉄
業発祥の地となり、鉄鋼業の発展
とともに繁栄を続けたこの町も、
1989年に新日本製鉄釜石製鉄
所の高炉が停止されてから、かつ
てのにぎわいを失うようになっ
た。63年には9万2千人を数えた
人口も、07年

時評

2007. 5. 15

ウエーブ

企業城下町の衰退という「二重の
悲劇」に見舞われたさびれた小都
市であるという、先入観をもつ人
がいる。しかし、実際に釜石市を
訪れ、キーパーソンにインタビュ
ーを重ねると、そのような先入観
が間違っていることに、すぐに気
づかされる。釜石市の人々は、活
気ある町の再生をめざして、上を
向き、前を向いている。

年(4801人)まで、高炉停止
前年の88年(4621人)の水準
を上回っていた。製造業の雇用が
維持された最大の要因は、釜石市
や新日鉄が積極的に企業誘致に取
り組み、それがある程度成果をあ
げたことにある。誘致企業が釜石
市およびその周辺地域に工場を新
設したのは、3交替24時間勤務を
抵抗なく受け入れる職場・地域・
などの第3次産業の比率は約60%

希望学釜石調査

希望学が釜石市に注目したの
は、二重の悲劇との遭遇にもかか
わらず、希望をもって町の再生を
めざす動きが活発だからである。
経済活性化につながる釜石市の動
きとして注目すべき点は、釜石製
鉄所の高炉停止後も製造業の雇用
規模が、それほど落ち込まなかつ
たことである。

家庭の風土、365日24時間稼働
が可能な釜石港の労働慣行など、
釜石市固有のメリットが存在する
からである。

これらのメリットは、新日鉄釜
石製鉄所が長年にわたって築き上
げてきたものである。高炉停止後、
新日鉄がもたらす直接の経済効果
は縮小したが、それでも、新日鉄
が構築してきた産業インフラは、

横を誇るウインドファーム(集合
型風力発電施設)、産業観光の対
象となる鉄の歴史館・釜石鉱山・
橋野高炉跡などが存在する。次に、
地域ブランドを確立することが重
要であるが、この点では、釜石ブ
ランドを三陸海岸ブランドや銀河
鉄道ブランド(花巻・遠野・釜石
を結ぶJR釜石線は、宮沢賢治の
『銀河鉄道の夜』のモデルとなっ
た)という広域ブランドと結びつ
けることができれば、活路が開け
る。

二重の悲劇に遭遇した釜石市が
活気づいて再生を実現するにいた
れば、同じく苦境に立たされてい
る全国の小都市にとっての「希望
の灯」になることは、間違いない。
我々は、釜石市で始まりつつある
地方における希望への挑戦が、今
後どのような展開をとげていく
か、期待を込めて見守ることにし
たい。